

2020年度 第1回学ぶ喜び・ESD連続公開講座 概要報告

奈良教育大学 中澤静男

◇開催日時 2020年7月22日(水) 19時～20時30分

◇方法 Zoomによるオンライン講演

◇参加者

現職教員等：阿彌、松谷、中澤哲也、新宮、春日、圓山、高良、中村、町田、山方、河野、駿河、川崎、高橋、賀川、浅井、山下、鈴木(五井平和財団)、尾上(森と水の源流館)

学生：西田、岩城、中村、津田、藤本、山崎、狗飼、岡本、亀井、根本、山田ひかり、山田桃子、櫛、北野、小池、山中、加藤、長滝谷、山口、福田、足立、塚田、大橋姫花、大橋快成、岩倉、川田、草田、長尾、高垣、谷垣、墨谷、小原

大学教員：大西、中澤、太田、吉田 計57名

◇テーマ 「素晴らしき教員人生」 講師：奈良教育大学准教授 大西 浩明

1983年～37年間の教員生活(すべて小学校)

自分が先生らしくなった、これでやっていけると思えるようになったのは40代になってから
教員として一人前になるのに20年間ぐらいはかかる

○阿彌先生(もと同僚)から見た大西先生とは

いつもすごいなあと思っていた こんな先生になりたい くやしいうらい

・子どもがすごく成長する どの子もコミュニケーション力

・学級のまとまり 協力的な子どもたちの姿

1. なってしまった小学校教員

一般大学で中・高の社会科の免許はとっていたが、教員になるつもりはなかった。

高校・大学で夢中になっていたのはキャンプ場の補助員(アシスタント)

子どもたちと仲良くなって手紙をもらったりした。それがうれしかった。

子どもと関わるのは楽しい→先生という道もあるかな。→県立小学校教員養成所一年制課程に入学
でも、本当は中学校の教員になりたかった。ピアノが苦手。でも、小学校教員になってしまった。

2. 自分だけが楽しければ・・・と思っていた

当時は夏休みが子どもと同じようにあった。これは楽しい!

授業なんか、なんとかなる。先生用の赤本(指導書)の通りやっていたら大丈夫。

バレーボールがしたかったので、バレーボールチームを作った。

バレーボールが中心、授業はそこそこ。これでいいと思っていた。十分に楽しかった。

3年間たったころ 女性の校長先生が授業中に教室に入ってこられた・図工の時間に色の混ぜ方の練習でネギを描かせていた。「まあ、上手に描けているねえ」と子どもに声をかけていった。少し前にこれではアカンと注意したところだったので、腹が立った。

3. 授業を変えなくては!

校長先生から「勉強してきなさい!」と言われ、市社会科教育研究室で1年間、はじめて真剣に授

業づくりの勉強をした。その後、指導主事の先生から、「社会科の集まりがあるから行ってきて」と言われて行ったのが県小学校社会科研究会

翌年、近畿大会がある。授業実践をする必要が生じた。提案授業をするよう頼まれた。

3年生：スーパー、商店街の単元だった。県社研の先生方が、日曜日にもかかわらず校区のスーパーや商店街の見学に来ていただき、授業づくりの目の付け所を指導していただいたり、授業づくりを教えてもらったりした。

→ 子どもが生き生きするようになった。子どもが変わるのを実感した。

指導書通りしてはだめだ。「授業を変えなくては！」

県社研の先生方の授業を色々と見せていただいた。

「あの発問、いいな」「板書のしかたがいいなあ」

「教師が教えるような授業はアカン。子どもが自分から、面白がって学んでいく授業じゃないと」

「全員が関われる授業にしよう。」「体験に勝る学びはない。体験重視だ。」「意見の交流・練り合いが大事だ」「そこにゲーム性があればさらにいい」→バラエティ番組には授業につかえるものが色々と目につく。(アンテナがはれるようになった)。自分の中でストックをつくっていく。はじめは社会科だけだったのが、他の教科にもしていった。

4. とにかく子どもの笑顔が見たい！

子どもの笑顔が一番身近で見ることができるのは学級担任だ。学級担任にこだわった。

○学級づくりでのこだわり

すべての子どもにとって居心地のいい空間を提供する。

ありのままの自分で過ごせる空間＝あるがままの友達を受け入れる。

学校は、一人では学べないことをみんなと一緒に学ぶところ。失敗しながらみんなと一緒に成長していくところ。みんながいるから楽しいところ。でも、楽しいている、本当の楽しさは味わえない。だから、しんどいことをしよう。

○みんなで楽しくなるために（最初の1日目に子どもたちに伝えたこと）

- ・だれにでも、あいさつは大きな声で元気よく
- ・話を聞くときは、相手の目を見て
- ・マイナスの言葉を言わず、プラスの言葉を
- ・きちんと言葉でキャッチボール
- ・最大限の想像力を働かせて相手の気持ちを考える
- ・何でもみんなで考える

☆「まわりの人を笑顔にすること」をすべての行動の基準に！

何か問題が生じるたびに立ち返って考えさせた

○「心の中を書くノート」 週1回 書きたいことを書く 1ページにしっかりと、心の中をそのままに書き、月曜日に提出。それ以外の宿題はなし 私も書きたいことを返事を書く

すっごいうれしかったこと、めっちゃしんどかったこと、「このやろう！」と思ったこと、「こんなことができるんだ」と感激したこと、「あほなことしたなあ」とくやんだこと、「あの人すごいなあ」と見直したこと、自分ってすごいなあ、自分をほめてあげたいこと・・・

→ 学期に1回はその子に対して思っていることを、ノートに1ページ書いて渡した

○大なわチャレンジ 連続2000回を目指す

クラスの団結力が高まる

○体育はみんなで心を見がく場

体育を学級経営の芯にしていた みんなで体を動かしてみんなで高まる場

振り返りカードを書かせて、それを子どもみんなに返す そして感じたことを出し合う

○特別活動を意味づける

年中行事のようにしている活動（菊づくり）を問い直し、意味を考える

枯れる菊もある。根がはってないからだ。土の中で見えないところの努力の大切さを伝える。

縦割り活動：6年生全員がリーダーだ。年中を通して1年生～6年生が仲良くできることをやろう。何のために縦割り活動するのかを考えておくことが大切。

ケナフを栽培し、紙すきをして、卒業証書をつくろう。（1年～6年みんなで育てたケナフ）

○学級通信

べつになくてもいいと思っていたけど・・・

保護者には、担任の思いをきちんと伝えなければ

5. 教員を目指すすべての人へ

○こんなにしてきな仕事はない！

一人の人生のうちほんの短い時間を共有しただけなのに、時を経て続く、人と人としての関係

○学び続けることの大切さ

「先生」と呼ばれることの責任の重さ「子どもへの情熱が教師の年齢」

もっと「いい授業」がしたい 教員という狭い世界から外に出ることが大切

最後に・・・

・職員室に戻ろう いろいろな先生に聞いてもらってください。子どもを話題に話をするために。

・「まあ、ええか」「もうええか」「なんとかなるから」と最後はそう思うようにしている

人生8勝7敗で、一つ勝ち越せたらそれで十分

フロアからの質問に答えて

・モチベーションの維持の仕方は？ おいしいものを食べておいしいお酒を飲む

最後は自分を見てもらうしかない

・どんな大人にしたい たくましく生きていける人になってもらいたい

「しんどいときにこそ、ぐっと地に足つけて生きていける人になってください」というメッセージを6年生には必ず書くようにしていた。

・今のうちにこれしとけ 違う世界に足を踏み入れたり、ふれたりしたらいい。